

古代メソポタミアにおけるビールとワインの文化

渡辺 千香子

Cultural Aspects of Beer and Wine in Ancient Mesopotamia

Chikako E. WATANABE

ビールは、シュメールの人々に古くから最も親しまれた飲み物であった。一方、ワインはイラク南部には交易でのみもたらされたため、高価で、主に上流階級や神々への奉納品として使われた。ビールをつかさどるニンカシ女神を称える讃歌では、詩的な表現を使ってビール醸造のプロセスが語られる。前3千年紀には「饗宴図」と呼ばれる儀礼的な宴の場面が表現され、長いストローを使って大きな甕状の容器から液体を飲む場面、ならびに杯を手にする人々の姿が描かれた。前1千年紀のアッシリアでは、狩猟で仕留めたライオンや牡牛の屍の上に王が液体を注ぎかける灌奠儀礼が行われた。アッシュルパニパルの浮彫りに刻まれた銘文には、この液体がワインであると記されている。

キーワード：ビール、ワイン、饗宴図、アッシリア王妃墓、^{かんてん}灌奠

Beer was the most commonly drunk alcoholic beverage in ancient Mesopotamia. A Sumerian hymn to the goddess Ninkasi describes the brewing process with elaborate literary expressions. Wine was imported into southern Mesopotamia, as the climate was not suitable for growing grapes. Because wine was expensive, it was used as a dedication to deities and consumed only among the upper classes in Sumer. Banquet scenes were frequently represented in art during the third millennium BC. These scenes typically show two drinking styles: one with a long tube inserted into a big jar that was placed on the ground, and the other with a cup or tumbler held in the hand, with an attendant serving the drink from a jug or pitcher. An Ashurbanipal relief provides evidence that a libation ritual was performed after the royal hunt during the Neo-Assyrian period. An inscription engraved on the relief mentions that wine was used for the libation, which the king poured over the bodies of the lions. Shallow cups similar to the one used by Ashurbanipal were discovered in the tombs of the Assyrian queens in Nimrud, where the vessels were made of intricately wrought gold, showing high levels of metalworking techniques.

Key-words: beer, wine, banquet scene, Assyrian Queens' tombs, libation

1. ビール

1.1. 文献資料におけるビール

シュメールのことわざにも、「良いもの、それはビール。嫌なもの、それは旅路」というものがある (Alster 1997: vol. 2, 123; ボテロ 2003: 161)。古代メソポタミアの人々にとって、ビールは古くから最も身近で親しみやすい飲み物であった。この諺では、好ましいものの筆頭にビールが挙げられる一方、嫌なものの筆頭に旅路が挙げられている。シュメール人にとっての旅路は、おそらく軍事遠征のために駆り出された兵役の旅を意味し、現代の観光旅行とは全く別物であったであろう。そのような苦役の対極にビールを挙げるほど、シュメール人にとってビールは心の和む存在だったといえる。

メソポタミアのビールの原料には、通常、大麦が使われた。大麦は、シュメールの初期王朝時代（前3000～2350年頃）以前からメソポタミアを代表する農産物であり、ビールの原料となった他に、粉にして主食のパンが焼かれ、砕いた大麦はお粥のように調理して食べられた。ビールは一般に大麦を使った「ビール・パン (bappir)」を大甕の水の中に入れて麦芽を加え、そのまま発酵させる方法で大量生産されたと考えられている (ハロー 2015: 147)。麦芽で処理したビール・パンに外皮を除いた穀粒を混ぜる過程で、好みによりハーブ・スパイス・ナツメヤシの実・ハチミツ等が加えられ、加熱したのち冷やされた。ハチミツやナツメヤシの実を加えることによって醗酵が助長され、どろどろしたビールの原料 (マッシュ) に水を加えて

濾過した。一般にビール・パンと訳される bappir については、シュメール語で粗く挽かれた大麦などを計量する単位で記録されていたことから、私たちが考える「パン」とは異なるとする見解がある (Damerow 2012: §4.6, §4.13)。大麦以外にも、エンマー小麦から作られたビールが知られており、エンマー小麦のビールは主に神への捧げものとして使われた。このためエンマー小麦製のビールは、大麦のビールよりも高級なビールと考えられている。その他、ナツメヤシの実から作った甘い発酵酒も、メソポタミアではビールと呼ばれていた (Bienkowski and Millard 2000: 47-48)。

ビールを表す文字として、今から5千年以上昔に書かれた最初期の楔形文書に、表意文字「KAŠ」が登場する。この文字は、「水」の中に「穀粒」ないしは「泡」がブクブク浮いている「壺」の形で表現され、シュメール語で「カシュ (kaš)」、アッカド語では「シカル (*šikaru*)」、「シラシュ (*siraš*)」と呼ばれた。「シカル」という言葉は、「酔う」という意味の動詞 *sakāru* に由来し、「酔わせるもの・酔わせる液体」という意味をもつ¹⁾。ビールを表す楔形文字は、丈高の壺の形をしており、時に注ぎ口が付いていることもある。このため前4千年紀のウルク期から知られている注口付き広口瓶や鉢について、本来はビールを入れるための容器だった可能性が指摘されている。

古代の文献には、いろいろな種類のビールが記録されている。「大麦ビール」の他に、「白ビール」「赤ビール」「黒ビール」「茶色ビール」「強いビール」「見た目の美しいビール」「良質のビール」「高級ビール」「最高級ビール」「質が劣るビール」「その年のビール」「古いビール」「甘いビール」「非常に甘いビール」「洗練された味のビール」など、多様なタイプのビールが言及される (ボテロ 2003: 161-162)。また、アルコール分を薄めた「水割りビール」の他、「100対50ビール」「三分の一ビール」「四分の一ビール」などの記述がある。ハローによれば、ウル出土の解説付き祭儀文書には、ビールの品質を示す等級が少なくとも5段階に分けて記されており、最高級のビールは「2対1ビール」に分類される黒ビールとされる (Levine and Hallo 1967: Text B = UET 5: 507)。これは一定量のビールを作るために、大麦の量が2倍必要であることを意味している。また「1.5対1」という品質のビールは2種類に分けられ、一方は「上ビール (kaš sig₅)」とされ、もう一方はおそらくワインで割ったビールらしい (KAŠ. DIN)。「1対1ビール」も2種類に分けられ、その一方は原料に大麦ではなくエンマー小麦が使われ、他方は単に「1対1ビール」と呼ばれた。「1対1ビール」のアッカド語名は *malmaru* (kaš-1-ta) で、「同量 (から造られたビール)」を意味する。これらの表現は、それぞれの種類のビールを

造るのにどれだけの穀物 (大麦) が必要かということを示した表現であることが、ウルの解説付き祭儀文書によって初めて明らかになった (ハロー 2015: 147-148)。

メソポタミアのビールは、生鮮食料品で保存がきかなかったため、その都度つくっては消費する必要があった。シュメールの時代、ビールは女性たちによって家庭で作られることが一般的であり、神殿では女神官たちがビールの醸造を担っていたと考えられる。後代になりビール造りが産業化されると、男性もビール造りに携わったことが知られるが、依然として家庭で飲むためのビールは女性たちの手で作られていたと考えられる (Stol 1994: 179-180)。ビールの醸造職人は、王宮や神殿に雇われた職人のリストに含まれ、アッシリアが征服した周辺領域からは、ビールが貢納品として届けられた。新アッシリア時代の都ニムルドが落成した際に催された祝賀会では、アッシュル・ナツイルパル2世 (前883~859年) が69,574人の招待客に10,000壺のビールと100壺の混合ビールをふるまったことが記されている (Grayson 1991: Ashurnasirpal II A.0.101.30: 292, line 115)。

1.2. 神話とビール

ビールをつかさどる神は、ニンカシ女神といい、淡水の神エンキと女神ニンティの娘として、流れる水から生まれた。ニンカシ女神は、ビールそのものを体現する存在であると同時に、神々に供するビールを醸造する役割も担っていた。ニンカシ女神を称える讃歌には、麦と水からビールが生まれ出でる神秘的な発酵の力が語られ、ビールは「肝臓を喜ばせ、心を悦びで満たすもの」と称えられている (Civil 1964; Sallaberger 2009)。『ニンカシ女神讃歌』は、詩的な表現によってビール醸造のプロセスを描写し、当時のビール作りを知るための貴重な資料となっている。

アッカド語版『ギルガメシュ叙事詩』のエピソードでも、ビールは重要な役割を果たす。ある時、ウルクの王ギルガメシュが、荒野に出没する野人エンキドゥを捕獲しようと思いつく。ギルガメシュは策を練り、娼婦をエンキドゥのもとに派遣することにした。エンキドゥは娼婦の魅力に我を忘れ、6日と7夜をとものにす。すると、以前の仲間だった動物たちはエンキドゥを怖れて彼に近寄ろうとしなくなる。動物たちから見捨てられ途方に暮れたエンキドゥは、娼婦に促されて、ギルガメシュのいる都市ウルクへ向かうことにする。その途上で、エンキドゥは生まれて初めて「ビール」と「パン」を口にす (George 2003: vol. 1, 560-561, II 44-45)。ここでビールは、人間の女性やパンとともに、エンキドゥを「野生」から「文明」的な存在へと転換させるための重要なイニシエーションの役割を担っている (Watanabe 2002: 150-152)。シュメール人に

とって、パンとビールは大麦を加工した文明的な食べ物と位置づけられ、野生や未開の食べ物と一線を画す存在であった。

神話『イナンナ女神とエンキ神』では、エンキ神がビールを飲んですっかり酔っ払ってしまい、「メ (me)」とよばれる貴重な「神々の摂理」ないしは「太古より神々が定めた掟」の数々を、気前よくイナンナ女神に与えてしまう大失態を演じる。酔いが醒めて我に返ったエンキ神は、慌てて家臣に女神のあとを追いかけて、「メ」を取り戻すというエピソードが語られている (岡田・小林 2008: 112-119)。

2. 饗宴図

メソポタミアの図像には、日常生活とは異なる改まった場で飲み物や食べ物を摂取する場面が描かれることがあり、これを「饗宴図」と呼んでいる²⁾。饗宴図は、前3千年紀の初期王朝時代の図像に登場し、特に初期王朝時代第3期にはこのモチーフが多様に展開された。前3千年紀の饗宴図は、主に円筒印章のモチーフとして描かれたもの、そして奉納板に描かれた図像が知られる。饗宴図はアッカド時代にもやや様式化された図像として頻繁に登場したが、イシム・ラルサ時代の作例以降、このモチーフはしばらく姿を消し、前1千年紀の新アッシリア時代になると、再び王宮浮彫りの構図として表現されるようになる (Pinnock 1994: 15-16)。

2.1. 初期王朝時代の饗宴図

初期王朝時代の饗宴図において、飲み物を摂取する場面は大きく2種類に分けられる。一方は長い管状のものを大きな甕に挿して液体を飲む場面、もう一方は杯から液体を飲む場面である。ウル王墓 (PG800) から出土した印章には、長いストロー状のものをを使って液体を飲む情景 (図1: 上段右)、ならびに杯 (タンブラー) を使って液体を飲む情景 (図1: 下段・上段左) の両方が描かれている。この円筒印章は、被葬者の右腕の近くに置かれた状態で発見され、王墓の被葬者は円筒印章に刻まれた銘文から、女王プ・アビ (「父の言葉」の意) であることが判明している。プ・アビの印章は上下二段に分けられ、上段では一對の男女がストローを使って甕から飲み物を飲み、下段では、注口つきの壺から注がれた液体をタンブラーから飲んでいる。タンブラーを使って飲む液体は、一般にワインだとする説もある。その場合、注口つきの壺に入れられた液体は、ビールではなくワインであったことになる。現代でもビールにはビール・ジョッキ、ワインにはワイングラスと、中身によって異なる容器を使うことから、この印章の上段と下段の場面で、飲み物の種類が異なることは十分に



図1 「饗宴図」 円筒印章 (左) と印影 (右)

初期王朝時代第Ⅲ期 a (前 2400 年頃)

ウル王墓出土 (女王プ・アビ墓)

ラピスラズリ 大英博物館収蔵 (BM ME 121545)

Reproduced courtesy of the Trustees of the British Museum.

考えられる。奉納板に描かれた饗宴図においても、杯 (タンブラー) を使って飲み物が飲まれる場面では、必ず傍らに従者が付き添って、注口付きの容器から飲み物を注ぐ姿が表現されている³⁾。またマリ出土の文書によれば、ビールは生ぬるい温度で飲まれた一方、ワインは高地からもたらされた氷を使って冷やして飲まれたことが知られる (Binkowski and Millard 2000: 48, 319)。

地面に置かれた大きな容器の中から長いストローを使って液体を飲む情景について、容器の中身は一般にビールであると解釈されているが、この場合に向かい合って座る二人の人物は男性と女性の組み合わせであることが多い。男女がともにビールを飲む饗宴図について、以前から「聖婚儀礼」や「新年祭」等の祭儀場面と関連づけた解釈が提唱されてきた。モートガットは、初期王朝時代の奉納板の研究に基づき、饗宴図は新年祭におけるタンムズ (ドゥムジ) の聖婚儀礼を表現していると考えた (Moortgat 1949: 19-21, 53-79)。それに対してアミエは異を唱え、饗宴図は大勢の人々が参列した多様な祭儀を表現していると主張した (Amiet 1961: 119; cf. Pinnock 1994: 18-19)。長いストローの先端には、不純物を濾すためのフィルターが取り付けられていたと考えられ、実際にシリアのメスケネ (現エマル) から出土した濾過装置はこのような用途で使われたと考えられる⁴⁾。この濾過装置は、長さ8cm前後の銅の合金で作られた筒型のものであり、側面に細かい穴が開けられ、管の先端に装着されて、ビールを濾過する役割を果たしたと考えられる。

ウル王墓の他の墓からの出土物に「ウルのスランダー」と呼ばれる軍旗状のものがある。このスランダーは、片面に戦闘場面、反対側の面に饗宴場面が、ラピスラズリ、紅玉髓、貝殻等の象嵌によって表現されている⁵⁾。



図2 「ウルのスタンダード」饗宴図
初期王朝時代第Ⅲ期 a (前 2400 年頃)
ウル王墓出土 大英博物館収蔵 (BM ME 121201)
撮影：筆者 Reproduced courtesy of the Trustees
of the British Museum.



図4 「アッシュルバニパルと王妃」饗宴図
ニネヴェ北宮殿出土 新アッシリア時代 (前 645~640 年頃)
石製浮彫 大英博物館収蔵 (BM ME 124920)
撮影：筆者 Reproduced courtesy of the Trustees
of the British Museum.



図3 「ウルのスタンダード」饗宴図 (部分)
初期王朝時代第Ⅲ期 a (前 2400 年頃) ウル王墓出土
大英博物館収蔵 (BM ME 121201)
撮影：筆者 Reproduced courtesy of the Trustees
of the British Museum.



図5 「アッシュルバニパルと王妃」饗宴図 (部分)
ニネヴェ北宮殿出土 新アッシリア時代 (前 645~640 年頃)
石製浮彫 大英博物館収蔵 (BM ME 124920)
撮影：筆者 Reproduced courtesy of the Trustees
of the British Museum.

戦闘と饗宴の場面が対をなしていることから、一般にここに描かれた饗宴図は、戦闘における戦勝を記念する祝賀会だと解釈されている。各画面は三段構成を成しているが、饗宴場面の上段部分には、人々が手に杯を持って列席する情景が描かれている (図2)。ここでは、身分の高い人物6名が左方向を向いて一列に座って杯 (タンブラー) を掲げ、画面の左手には、この6名よりも一回り体形の大きな男性が彼らに向かい合う形でタンブラーを手にしている (図3)。身体の高い男性はここで明らかに身分が最も高く、重要な人物であることが示され、支配者 (王) を描いた可能性が考えられる。この場面で人々の手に握られたタンブラーと非常に良く似た形状の黄金の杯はウル王墓から出土している⁶⁾。この器の形状は、上部に向かってやや広がるような形を呈し、側面の縁には切り込みでギザギザの文様が刻まれている。底部には8枚の花弁を持つロゼッ

ト (rosette : 開花文様) が装飾として刻まれている。ウル王墓からは、注ぎ口のついた黄金製容器や細い注ぎ口をもった浅い黄金や銀製の容器、また注ぎ口が奇妙に曲がった貴金属製容器や貝殻の自然の形が容器として使われた作例も知られている。ピノック等の研究によれば、シュメール時代の饗宴図は、単なる飲食の場面ではなく、複数の宗教的・祭儀的な催しと関連づけて考えるべきだとされる (Pinnock 1994: 24-25)。実際に、ウル王墓から出土した多くの貴金属製の容器は、日用品として使われたものというよりは、むしろ祭儀や儀礼に用いられた特別な容器だったと推測される。



図6 「アッシュルバニパルと王妃」饗宴図（部分）
ニネヴェ北宮殿出土 新アッシリア時代（前645～640年頃）
石製浮彫 大英博物館蔵（BM ME 124920）
撮影：筆者 Reproduced courtesy of the Trustees
of the British Museum.



図7 「アッシュルバニパルのライオン狩りと灌奠儀礼」
ニネヴェ北宮殿出土 新アッシリア時代（前645～640年頃）
石製浮彫 大英博物館蔵（BM ME 124886）
撮影：筆者 Reproduced courtesy of the Trustees
of the British Museum.

2.2. 新アッシリア時代の饗宴図

前7世紀のアッシリア王宮浮彫りに、王アッシュルバニパル（前668～631年頃）とその王妃が王宮庭園の中で催した饗宴の場面が描かれている（図4）。王は長椅子に身をゆだね、王妃と向かい合っている。二人の頭上にはブドウの蔓が延びて木陰を作り、ブドウの実がたわわに実っている。王は右手に底の浅い椀、左手にはスイレンないしは百合のような花を握っている。一見すると、のどかなガーデンパーティーのように見えるが、王の視線の先をたどれば、庭園内の女官やハープ奏者の頭上の枝に、切り落とされた敵の首がぶら下げられている（図5）。この首は戦闘で討ち取った敵国エラムの王テウンマンのものであり、この場面も「ウルのスタンダード」同様に、戦闘と饗宴が密接につながっていることが認められる。王妃が手にしている器は底の浅い椀で、口縁がわずかに外側に反り返るアッシリア特有の形を呈している（図6）。同じ形の黄金製の器は、ニムルドの北西宮殿床下から発見されたアッシリア王妃墓の第2墓室からも出土している（Damerji 1999: Abb. 31）。第2墓室の被葬者は、ティグラト・ピレセル3世（前744～727年）の王妃ヤバー、ならびにサルゴン2世（前721～705年）の王妃アタリアであり、両者とも前8世紀後半に遡る。器の側面には、フルーティングの優雅な溝が形成され、器の中央にはロゼットが刻まれている。同じスタイルの黄金製の器は、第3墓室からも出土している。第3墓室の被葬者は、前9世紀のアッシュル・ナツィルパル2世王妃のムリッス・ムカンニシャト・ニヌアとされる。この作例では、器全体がスイレンをかたどった浅底の器形を呈し、口縁にはロゼットと「くの字」形の文様が切り込み技法で刻まれている（Damerji 1999: Abb. 47-

48）。花の中心部を成す器の中央は、内側に丸く盛り上がった円形を呈し、そこにはロゼットが刻まれ、その周囲をギローシュ（guilloche：縄編み文様）のパターンで囲む高度な技術が使われている。これらの容器は、おそらく王妃たちの存命中に祭儀や祝典など、特別な機会に用いられたものと考えられる。

3. ワイン

3.1. 狩猟後の儀式に使われたワイン

一体これらの容器には、どのような液体が入れて使われたのだろうか。アッシュルバニパルの浮彫りには、文献と図像資料によって使われた液体の種類を特定できる貴重な作例がある。ニネヴェの北宮殿S¹室から出土した浮彫りに、アッシュルバニパル王がライオン狩りの後で行なった「灌奠」(libation) とよばれる祭儀を描いたものがある（Barnett 1976: plate LIX 下段）。灌奠とは、酒や水などの液体を地面や犠牲獣の上に注ぎかける行為である。この浮彫りでは、アッシュルバニパルが狩猟で仕留めたライオンの死体が画面左手から運ばれ、画面中央に置かれた供物台と香炉の前に横たえられている。王は象徴的なジェスチャーとして、狩猟で使った弓をライオンの死体の上に立て、ライオンの身体に液体を注ぎかけている（図7）。この場面の左上には楔形文字の銘文が刻まれており、ここで行なわれていることを説明している。

私、アッシュルバニパル、世界の王、アッシリアの王、アッシュル神とムリッス女神に至高の力を授けられた者。私が殺したライオンたちの上に、私は戦闘の女神イシュタルの恐ろしい弓を立てた。彼らの上に私は

捧げものを捧げた。彼らの上に私はワイン (GEŠTIN) を注いだ。(Barnett 1976: 54)

この銘文の内容から、王が狩りの獲物であるライオンに注ぎかけている液体がワインであると判明し、捧げ物としてワインをライオンの上に注いでいることが明らかとなる。これより約200年前のアッシュル・ナツイルパル2世の浮彫りにも、同じように狩りの獲物となったライオンの死体の傍らで王が浅底の器を手に行っている場面が表現されている (Budge 1914: pl. XIX-2)。また同王が行なった牡牛狩りの後にも、同様の儀式が執り行われた (Budge 1914: pl. XIX-1)。しかし、アッシュル・ナツイルパル2世の浮彫りには、これらの場面を説明する銘文がなく、また器から流れ出る液体も描かれていないため、手にした器で何をしているのかが不明であった。後代の王アッシュルバニパルの灌奠の表現と同じコンテキストで考察することにより、アッシュル・ナツイルパル2世の時代にも、王の狩猟の後に灌奠を行っていたことが明らかにされた。

メソポタミアにおける灌奠では、水を使った灌奠が最もよく知られており、死者の供養に水の灌奠は欠かせないものだった。一方、ビールとワインは神殿の儀式で頻繁に使われ、神々への供物として捧げられることが多かった。グデア王の碑文には、神殿において「ビールは鉢 (bur) へ、ワインは水差し状のピッチャー (dug) に注ぐ」という記載がある (Edzard 1997: 92, Cyl B vi 26)。ウル、ギルス、ニップルから出土したシュメールの奉納板には、裸体の神官が神の前で細長い注口のついたピッチャーを捧げ持っている場面が描かれており、この記述に沿えば、神官が行っている儀式はワインを注ぐ灌奠だと考えられる (Reade 1991: 43, fig. 37; Pritchard 1969: 197, figs. 597 and 600)。同じような形をした黄金製のピッチャーはアッシリア王妃墓 (第3墓室) から出土している (Damerji 1999: Abb. 49-52)。ピッチャーには把手と注口があり、胴部や縁の部分には打ち出し技法で狩猟図が施されたほか、把手の先端はライオンの頭部を形成し、高度な加工技術が駆使されている。

3.2. 文献資料におけるワイン

ワインは、シュメール語で「ゲシュティン (geštin)」、アッカド語で「カラーヌ (karānu)」と呼ばれ、両者とも「ワイン」だけでなく「ブドウの実や房」ないしは「ブドウの木」の意味を併せ持っている。従ってこの言葉がどの意味で使われているかは、文脈から判断しなければならない。明らかに「ワイン」の意味で使われていることがわかる最古の例は、前24世紀頃の都市国家ラガシュの王ウルイニムギナ (ウルカギナ) の碑文である。この碑文には、

大きな瓶に入れた「ゲシュティン」を山岳地から運び、王が新築した蔵に納めたことが記録されている (Sollberger and Kupper 1971: 78; ボテロ 2003: 166)。ここに言及される「ゲシュティン」は、瓶に入れて蔵に保管されたことから、その中身はほぼ間違いなくワインであると考えられる。

ブドウは、レヴァントやアナトリア、シリア北部、メソポタミア北部、ザグロスの周辺地域など、降雨量の十分な地域でのみ栽培が可能だった。多くの場合、ブドウは山岳地で栽培されたことから、メソポタミアではワインが「山のビール (KAŠ. SAG KUR)」とも呼ばれた。特にアレppoの北東に位置するカルケミシュは、ワイン交易の中心地として栄えた。ワインはここからユーフラテス河を水上輸送で運ばれ、マリやシッパルを経た後で、メソポタミア南部にもたらされた。イラク南部の土地はブドウの生育に適さないため、ワインは交易でのみ流通した「輸入品」であり、それゆえに高価であった。そのため、シュメールでは主に上流階級の飲み物として、ないしは祭儀における神への奉納品として使われた。このことは、メソポタミアのさまざまな食料を羅列した語彙表において、ビールには200項目もさかれて多種多様な語彙があったのに対して、ワインの語彙はわずか10項目しかないことにも表れている (ボテロ 2003: 165-170)。

ワインの種類を表す表現には、「赤ワイン」「透明なワイン (白ワイン)」「甘いワイン」「強いワイン」「上等なワイン」「二級ワイン」「早い (若い) ワイン」「古いワイン」などが知られる。また、ブドウの産地によって名付けられたワインもあり、「インザッラ」「アルナバーヌ」「フルブヌ」「トゥピラシュ・ワイン」など、産地名で呼ばれた銘柄が知られている。マリには、ワインのブレンドを行なう専門職があった。普段ピチュメン (瀝青) の輸送に使っていた船でワインを輸送したために、ワインの香りが損ねられてしまったと苦情を申し出た古代の「ソムリエ」の手紙も知られる (Bienkowski and Millard 2000: 319)。イラク北部に位置するアッシリアでは、ブドウの栽培が可能であり、最も良質のブドウはニネヴェの東にあったブドウ園で収穫されたという。

前9世紀にアッシュル・ナツイルパル2世が築いたニムルドの北西宮殿は、2千リットルものワインを保管することが可能だった。アッシュル・ナツイルパル2世が新しい都ニムルドの落成を記念するため10日間にわたって開催した祝賀会では、皮袋に入ったワイン1万個分が飲まれた (Grayson 1991: Ashurnasirpal II A.0.101.30: 292, line 116)。アッシリアで消費されたワインには、西方のアラム王国からもたらされた貢納品や戦利品も含まれていたと考えられている。

アッシュル・ナツイルパル2世の王妃ムリッス・ムカン

ニシャト・ニヌアの墓からは、副葬品として納められた極めて精巧な細工の施された黄金製の冠が発見された (Damerji 1999: Abb. 42-45)。冠の側面には、丸い実と8枚の花弁を持つ花があしらわれ、頭頂部にはパッションフラワー (時計草) の花が一輪おかれている。冠の頭頂部全体には、ブドウの葉が広がり、葉の間にはカールした蔓が見える。冠の内側には、小さなラピスラズリ製のブドウの房が装着されている。王妃の冠のモチーフにブドウが選ばれたことは、豊饒の概念など、何らかの象徴的な意味が込められていた可能性が指摘される。

おわりに

メソポタミアの文化において、ビールは庶民から貴族まであらゆる人々にとって最も身近な酒であった。同時に、醸造のプロセスを経て完成する「文明的な飲み物」として、メソポタミア文化の中で極めて重要な位置を占めていた。ビールを飲む行為は、聖婚や新年祭などの重要な行事の中に組み込まれ、また神への奉納品としてもビールは欠かせないものだった。一方、シュメール人にとってのワインは、輸入によってもたらされる高級な酒であり、庶民の気軽な酒とはほど遠く、上流階級に限られた飲み物であった。また、高価であったことから神々への捧げ物として奉納され、灌奠等の祭儀や儀礼に用いられることが多かった。

註

- 1) *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, vol. 17, § part 2: 420-428.
- 2) Selz 1983; Pinnock 1994; Schmandt-Besserat 2001; Pollock 2003; Romano 2012; Winter 2013; Renette 2014; Romano 2015.
- 3) 例えば、ウル・ナンシェの奉納版における画面右下の人物：田辺・松島編 2000: 26 (図 11) 参照。
- 4) ボテロ 2003: 口絵「ビールの濾過装置」参照 (AO27017, AO27020, ルーブル美術館収蔵)。
- 5) 田辺・松島編 2000: 32-33 (図 19、20) 参照。
- 6) Strommenger 1964: fig. XVII (upper figure: fluted golden beaker) 参照。

参考文献

- Alster, B. 1997 *Proverbs of Ancient Sumer: The World's Earliest Proverb Collections*. Bethesda, Maryland, CDL Press. 2 volumes.
- Amiet, P. 1961 *La glyptique mésopotamienne archaïque*. Paris, Édition du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Barnett, R. D. 1976. *Sculptures from the North Palace of Ashurbanipal at Nineveh (668-627 B.C.)*. London, British Museum Publications Ltd. for the Trustees of the British Museum.
- Bienkowski, P. and A. Millard (eds.) 2000 *British Museum Dictionary of the Ancient Near East*. London, British Museum Press.
- Budge, E. A. W. 1914 *Assyrian sculptures in the British Museum*. London.
- Civil, M. 1964 Hymn to the Beer Goddess and a Drinking Song. In R. D. Biggs and J. A. Brinkman (eds.), *Studies Presented to A. Leo Oppenheim*, 67-89. Chicago, University of Chicago Press.
- Damerji, M. S. B. 1999 *Gräber assyrischer Königinnen aus Nimrud*. Jahrbuch des Römisch-Germanischen Zentralmuseums 45, Mainz.
- Damerow, P. 2012 Sumerian Beer: The Origins of Brewing Technology in Ancient Mesopotamia, *Cuneiform Digital Library Journal* 2012: 2.
- Edzard, D. O. 1997 *Gudea and His Dynasty*. The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods volume 3/1. Toronto, University of Toronto Press.
- Grayson, A. K. 1991 *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC I (1114-859 BC)*. The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Assyrian Periods vol. 2. Toronto, University of Toronto Press.
- Levine, B. A. and W. Hallo 1967 Offerings to the temple gates at Ur. *HUCA* 38: 17-58.
- Moortgat, A. 1949 *Tammuz: Der Unsterblichkeitsglaube in der altorientalischen Bildkunst*. Berlin, W. de Gruyter.
- Orthmann, W. 1975 *Der alte Orient*. Propyläen Kunstgeschichte 14. Berlin, Propyläen.
- Pinnock, F. 1994 Considerations on the «banquet theme» in the figurative art of Mesopotamia and Syria, In L. Milano (ed.), *Drinking in ancient societies: history and culture of drinks in the ancient Near East, papers of a symposium held in Rome, May 17-19, 1990*, 15-26. History of the ancient Near East Studies 6. Padova, Sargon.
- Pollock, S. 2003 Feasts, Funerals, and Fast Food in Early Mesopotamian States, In T. Bray (ed.), *The Archaeology and Politics of Food and Feasting in Early States and Empires*, 17-38. New York, Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Pritchard, J. B. 1969 *The Ancient Near East in Pictures relating to the Old Testament*, second edition with supplement. Princeton & New Jersey, Princeton University Press.
- Reade, J. 1991 *Mesopotamia*. London, British Museum Press.
- Renette, S. 2014 Feasts on Many Occasions: Diversity in Mesopotamian Banquet Scenes during the Early Dynastic Period. In P. Altmann and J. Fu (eds.), *Feasting in the Archaeology and Texts of the Bible and the Ancient Near East*, 61-86. Winona Lake, IN., Eisenbrauns.
- Romano, L. 2012 Banqueting in a Temple. In R. Matthews and C. Curtis (eds.), *Proceedings of the 7th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East: 12th April – 16th April, the British Museum and UCL, London*, 269-281. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Romano, L. 2015 Holding the Cup: Evolution of Symposium and Banquet Scenes in the Early Dynastic Period. In R. Dittmann and G. Selz (eds.), *The Long Way to a Historiography of the Early Dynastic Period(s)*, 289-302. *Altertumskunde des Vorderen Orients*, Bd. 15. Münster, Ugarit Verlag.
- Sallaberger, W. 2009 Bierbrauen in Vesen: Eine neue Edition und Interpretation der Ninkasi-Hymne. In C. Mittermayer et al. (eds.), *Altorientalische Studien zu Ehren von Pascal Attinger*, 291-328. *Orbis Biblicus Orientalis* 256. Fribourg, Academic Press/Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Schmandt-Besserat, D. 2001 Feasting in the Ancient Near East. In M. Dietler and B. Hayden (eds.), *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics, and Power*, 391-403. Washington DC, Smithsonian Institution Press.
- Selz, G. 1983 *Die Bankettszene. Entwicklung eines "überzeitlichen" Bildmotifs in Mesopotamien von der frühdynastischen bis zur Akkad-Zeit*. Freiburger altorientalische Studien 11. Wiesbaden.
- Sollberger, E. and J. R. Kupper 1971 *Inscriptions royales sumériennes et ak-*

- kadiennes*. Paris.
- Stol, M. 1994 Beer in Neo-Babylonian Times. In L. Milano (ed.), *Drinking in Ancient Societies: History and Culture of Drinks in the Ancient Near East, Papers of a Symposium Held in Rome, May 17-19, 1990*, 155-183. *History of the Ancient Near East Studies* 6, Padova, Sargon.
- Strommenger, E. and M. Hirmer 1964 *5000 Years of the Art of Mesopotamia*. New York, Harry N. Abrams Inc.
- Watanabe, C. E. 2002 *Animal Symbolism in Mesopotamia: A Contextual Approach*. *Wiener Offene Orientalistik* 1. Vienna, Institut für Orientalistik, Universität Wien.
- Winter, I. 2013 *Le banquet royal assyrien: Mis en œuvre de la rhétorique de l'abondance*. In C. Grandjean, C. Hugonoit and B. Lion (eds.), *Le banquet du monarque dans le monde antique: Table des hommes*, 287-309. Rennes, Presses Universitaires François-Rabelais.
- 岡田明子・小林登志子 1977『シュメル神話の世界：粘土板に刻まれた最古のロマン』中公新書、中央公論新社。
- 田辺勝美・松島英子（編）2000『世界美術大全集 東洋編 第16巻 西アジアの美術』小学館。
- ハロー、ウィリアム・W. 2015『起源 古代オリエント文明：西欧近代生活の背景』（岡田明子訳）青灯社。
- ボテロ、J. 2003『最古の料理』（松島英子訳）法政大学出版局。

渡辺 千香子
大阪学院大学

Chikako E. WATANABE
Osaka Gakuin University